

白河院の和歌

花 上 和 広

要 旨

白河院の詠じた和歌二八首の一首一首について、歌の集成をしながら詠作年次の特定に重きをおいて考察を試みるとともに、詠まれた場や一緒に和歌を詠んだ人物について考察した結果、以下のことを知り得た。

白河院の天皇時代、上皇・法皇時代、また詠作年次未詳和歌の三つに分けて、詠歌状況をみた。

一、白河天皇時代 在位期間 一三首

二、白河上皇・法皇時代 讓位後から出家・崩御まで 九首

三 詠作年次未詳和歌 六首

「一、白河天皇時代」つまり在位期間に、白河院は二八首中、一三首と最も多くの歌を詠じている。天皇という立場で行事や内裏の歌会など、歌を詠む機会が多かったのであろう。「二、白河上皇・法皇時代」について、上皇時代は法勝寺御幸などの大規模な行事での詠がいくつか指摘できる。また法皇時代を中心に熊野御幸での三首が確認できる。

白河院の生涯における詠歌状況は、在位期間・上皇時代までは行事や御会等で歌を詠んだが、出家以後の法皇時代は詠作が少ない。なお、『類題鈔』により、今までわからなかった歌の年次が特定できたことから、在位期間に多くの歌が詠まれたことが判明した。

同じ折に歌を詠んだ歌人で、目立つのは、師実、経信、匡房の三人である。師実は、摂関家の代表であり天皇家の歌会等にも顔を頻繁に出した。経信、匡房といった和漢に通じた当時の代表的歌人も歌を詠んでいる。二人は、白河院主催の歌会で序者や題者としても活躍した。

一、はじめに

白河天皇（天喜元年「一〇五三」～大治四年「一二二九」、七七歳）は、後三条天皇の第一皇子、母は藤原茂子で、第七二代天皇である。

後三条天皇が親政を試み、それを継承した白河天皇は、その後院政をはじめた。治天の君として君臨したことで有名である。かつて白河天皇は摂関家の勢力を弱め、天皇親政の確立をめざし、摂関家とも対立したかのようにとらえられていた。⁽¹⁾ 国文学の領域でも、たとえば、『後拾遺集』の下令にしても勅撰集を編纂することで、天皇家の力を誇示する、政治の道具のひとつとして捉える、という主張がある。⁽²⁾

しかし白河天皇や師実の詠歌などを丹念に見ていると、摂関家と天皇家とは融和的に関わっていると思われる場面があるのである。⁽³⁾ 白河天皇と摂関家との血筋を見ても、関係は深いといえる。白河天皇の中宮となったのは、藤原賢子である。賢子は源頭房の実娘であるが、藤原師実の養女となり、入内した。白河天皇は賢子との間に、敦文親王（早世）、堀河天皇をはじめ、媯子内親王、令子内親王、禎子内親王と二皇子、三内親王を儲けた。白河天皇は、賢子を通して、摂関家の師実、また摂関家と関係の深い村上源氏の源頭房などと血縁関係を持つにいった。なお、師実室は頭房の妹麗子である。

そこで本稿では両家の融和関係を重視して歌の解釈をする立場から白河院の詠歌状況を明らかにする。これまで、白河院ならびに院政期の和歌動向を論じたものとして以下のものがある。

橋本不美男氏『院政期の歌壇史研究』（武蔵野書院 一九六六年）

上野 理氏『後拾遺集前後』（笠間書院 一九七六年）

井上宗雄氏『平安後期歌人伝の研究 増補版』（笠間書院 一九八八年）

橋本氏は、第一章「白河院と和歌」において、承保二年十月の大井川行幸和歌に天皇親政にかかわって白河院の態度に言及している。上野氏は、白河院親政から院政への転換期における『後拾遺集』撰集の意味を検討して『後拾遺集』を和歌史的に位置づけた。井上氏は、歌人伝を通して白河朝から白河院政期におよぶ歌壇の動向に言及している。橋本・上野・井上氏の研究は、どれも白河朝や白河院政期全体の和歌動向に目を向けた研究であるが、天皇家と撰関家の関係については、いずれも対立しているという構図のもとに論が組み立てられている。

撰関家と天皇家の関係について、両家が対立している上での和歌解釈でなく、融和的な上での和歌解釈をするために、これまで撰関家側からのアプローチをしてきたので、今後は天皇家からのアプローチとして、白河院の詠じた和歌についても一首一首を見ていく必要があると考える。

よって、本稿は、新たに『類題鈔』などの資料を用いながら、白河院の詠じた和歌一首一首について、歌の集成をしながら、詠作年次の特定することに重きをおいて考察を試みるものである。合わせて詠まれた場や一緒に和歌を詠んだ人物についても言及し、白河院の詠んだ個々の和歌と全体状況を捉えたい。白河院の和歌活動を論ずるための基礎資料として示すものとする。

和歌を引用するにあたっては、特に断らない限り、勅撰集・私撰集・歌合は『新編国歌大観』に、私家集は『新編私家集大成』によった。散文等は小学館『新編日本古典文学全集』に、袋草紙は『新日本古典文学大系』によった。史料は主に『国史大系』『大日本古記録』等によった。なお引用する本文は、漢字をあてる等、私に直したところもある。

二、白河院の和歌

『皇室文学大系』⁽⁵⁾によると、白河院の詠じた歌は、勅撰集二十九首、私撰集一首の合計三十首があげられている。これらの歌を考証した結果、新古今集二四九番歌と新千載集九六番歌は、白河院の詠でないと考えられる。よって、現段階では勅撰集二十七首、私撰集一首の合計二十八首が白河院詠の総数である。

白河院の詠んだ和歌で、勅撰集・私撰集等におさめられている和歌をまとめると、次のようになる。但しその和歌が二つ以上の集に収められている場合は、勅撰集を優先してあげた。

後拾遺集 七首（二七七、二八三、三一五、三六一、三七九、六三二、一〇五〇）

金葉集 五首（二三、三五、九六、一一六、一八〇）

詞花集 一首（二七）

千載集 一首（七七）

新古今集 三首（一八〇、一九八、一九〇六）

※（皇室文学大系は一首「二四九」を加えている）

続古今集 二首（四九八、五一五）

新後撰集 一首（五五九）

玉葉集 一首（一〇六八）

続千載集 一首（一二二）

続後拾遺集 二首（一八二）

風雅集 一首（一八一）

新千載集 一首（六五九）※（皇室文学大系は一首〔九六〕を加えている）

新後拾遺集 一首（九五）

続詞花集 一首（三一二）

全二十八首

次の表は、白河院の詠んだ和歌について、詠作年次が特定できる和歌や推定できるものに早い順に番号をふって並べたものである。また、その他出を下に記した。なお、『皇室文学大系』で白河院詠とする新古今集二四九番歌は㉔、新千載集九六番歌は㉕とした。

歌集名・部立 歌番号

他出

①玉葉集・賀 一〇六八 万代集三七五七・題林愚抄一〇四三九

②後拾遺集・冬 三七九 時代不同歌合一九〇・和歌初学抄一八七・古来風体抄四二七・今鏡二二・十訓抄

二二・六条宣旨集一〇一・定家八代抄四八三・五代集歌枕一一六二・歌枕名寄五五〇
歌枕名六八〇

③新古今集・夏 一九八 題林愚抄二〇一八・題林愚抄九三八四

④後拾遺集・秋上 二七七 和歌一字抄四三・題林愚抄三六三〇

⑤続後拾遺集・夏 一八三 題林愚抄二一一八・秋風集一六〇

⑥新古今集・夏 一八〇 題林愚抄一七四一

白河院の和歌（花上）

- | | |
|---------------|-----------------------------------|
| ⑦後拾遺集・秋下 三六二 | 和歌一字抄八三 |
| ⑧金葉集・夏 九六 | 和歌一字抄五五九・題林愚抄一七〇八 |
| ⑨後拾遺集・秋上 二八三 | 和歌一字抄二七八・題林愚抄三六八〇 |
| ⑩後拾遺集・秋上 三一五 | 題林愚抄二九八五 |
| ⑪後拾遺集・恋一 六三二 | 時代不同歌合一九二・歌枕名寄五七四九 |
| ⑫後拾遺集・雜四 一〇五〇 | 和歌一字抄五〇三・題林愚抄九〇四九 |
| ⑬続古今集・秋下 五一五 | 夫木抄六〇四四・秋風集四二五・雲葉集七一七・題林愚抄四六八六 |
| ⑭続後拾遺集・冬 四二三 | 歌枕名寄六〇〇 |
| ⑮風雅集・春中 一八一 | 万代集二八八・師実集Ⅱ二三・続古事談八 |
| ⑯詞花集・春 二七 | 後葉集四一・題林愚抄八七九 |
| ⑰金葉集・秋 一八〇 | 和歌一字抄七七四・袋草紙一四二・弁内侍日記二八六・題林愚抄四一〇四 |
| ⑱金葉集・春 三五 | ナシ |
| ⑲千載集・春下 七七 | 和歌一字抄二九一・題林愚抄九一四・中右記永長元年三月一日条 |
| ⑳新古今集・神祇 一九〇六 | ナシ |
| ㉑新千載集・冬 六五九 | 歌枕名寄八三六八 |
| ㉒新後撰集・羈旅 五五九 | ナシ |
| ㉓金葉集・春 二三 | 和歌一字抄四五二・題林愚抄六五四 |
| ㉔金葉集・夏 一一六 | ナシ |

②⑤ 統古今集・秋下 四九八 雲葉集六五九・題林愚抄四六二七

②⑥ 統千載集・春下 一二二 雲葉集一五六

②⑦ 新後拾遺集・春下 九五 ナシ

②⑧ 統詞花集・冬 三一二 ナシ

④ 新古今集・夏 二四九 匡房集Ⅰ七六・匡房集Ⅱ三一・時代不同歌合一八八・和歌一字抄五六〇、八一三

⑤ 新千載集・春上 九六 範永集五七

三、白河院の和歌の考証

白河院の詠まれた和歌で、詠作年次の特定を中心に考証した。詠作の場やその場に居合わせた人物についても言及した。以下、詠作年次の早いものから順次考証していく。二十八首すべてを対象とするが、三つに分けた。一つ目は「白河天皇時代（在位期間 延久四（一〇七二）一二・二九〇 応徳三（一〇八六）一一・二六）」、二つ目は「白河上皇・法皇時代（讓位後から出家・崩御まで 応徳三（一〇八六）一一・二六〇 大治四（一二二九）七・七）」、三つ目は年次未詳歌である。また年次未詳歌に加えて、白河院詠と考えられない④と⑤の歌についての考察も行った。

三一、白河天皇時代（在位期間 延久四（一〇七二）一二・二九、応徳三（一〇八六）
一一・二六）

*

白河院の詠でもっとも早い時期に詠まれた歌は、『玉葉集』（賀・一〇六八）に見える次の歌である。

承保二年四月、清涼殿にて、久契明月といふことを講ぜられけるついでに

白川院御製

①しづかなるけしきぞしるき月かげのやほ万代を照すべければ（一〇六八）

右の歌は『万代集』（賀）に経信詠とともに次のように見える。

久契明月といふことをよませ給ける

白河院御製

しづかなるけしきぞしるき月かげのやほよろづ世をてらすべければ（三七五七）

大宰権帥経信

よろづ世と月をあかなく契るかなあまてる神にいのりかけつつ（三七五八）

歌題「久契明月」を手がかりに同じ折に詠まれた歌について調べて見ると、『秋風集』（賀）に、

承保二年四月十八日、中殿にて、久契明月といふことを講ぜられけるにより侍りける

京極の前関白

千とせへむことはさらなり君が代の光まされる夏の月かな（六四六）

左京大夫きむふさ

かねてよりしるくも有るかな雲の上に久しかるべき月の光は（六四七）

と見える。右歌の作者「左京大夫きむふさ」は藤原公房（藤原資房男）のことで、中宮亮には承保二年（一〇七五）四月十二日になったばかりである。中宮は賢子。

私家集の『経信集Ⅲ』や『師実集Ⅱ』^{（6）}にも、

久契明月、内裏にて

よろづよと月をあなくちぎるかなあまてらします神にいのりて（経信集Ⅲ、一一二）

承保二年四月十八日、清涼殿ニテ、久契明月トイフ題ヲ講ゼラレケルニヨミ給ケル

チトセヘムコトハサラナリキミガヨノヒカリマサレルナツノ月カナ（師実集Ⅱ、九）

と見える。

これらの歌より、①の歌は、承保二年（一〇七五）四月十八日、清涼殿にて、詠まれたことがわかる。白河院三三歳の詠。この歌会に参加していたのは、藤原師実（三四歳、左大臣）、源経信（六〇歳、参議、皇后宮権大夫）、藤原公房（四六歳、中宮亮）等である。

*

『後拾遺集』（冬）に次の歌がある。

承保三年十月、今上、みかりのついでに、大井川にみゆきせさせ給に、

よませたまへる

御製

②おほるがはふるき流れをたづねきてあらしの山のみちをぞ見る（三七九）

この歌の他出は、歌集等に見出せないが、歴史物語や説話の作品で、②の歌を含めて白河院大井川行幸のエピソードとして載っているものがある。例えば、『今鏡』（すべらぎの中、第二 紅葉の御狩）に、

承保三年十月二十四日、大井川に行幸せさせ給ひて、嵯峨野にあそばせ給ひ、御狩などせさせ給ふ。その度の御歌、

大井川ふるき流れをたづねきて嵐の山の紅葉をぞ見る

など詠ませ給へる、昔の心地して、いとやさしくおはしましき。：

と見え、『十訓抄』（十ノ五十八）に、

白河院、御位の時、野の行幸といふことありて、嵯峨野におはしつきて、…………

歌も多く聞えける中に、御製ぞすぐれたりける。

大井川古き流れをたづね来て嵐の山の紅葉をぞ見る

通俊中納言、後拾遺をえらばれける時、入れ奉りけり。

と見える。

『扶桑略記』承保三年十月二十四日条に、その模様が次のように記されている。

丁未、行^二幸大井河^一、御鷹追遙也、公卿侍臣等皆以供奉、右大臣源朝臣師房述^二和歌序^一、出居

式部卿敦賢親王参^二於御船^一、列^二大臣座之上^一、但馬守源高房於^二桂河梅津邊^一作^二御在処^一矣、

右の記事によれば、源師房が序を書いていることが知られる。ここでは取り上げないが、『本朝統文粹』にもそのことが見える。

その他、この大井川行幸で詠まれた歌が、各歌集等に以下のように多く採られている。^(一)

承保三年、大井河に行幸の日よみ侍りける 大宮右大臣（藤原俊家）

大井河ふるきみゆきのながれにてとなせの水もけふぞすみける（新勅撰・賀、四七九）

前中納言伊房

おほる河けふのみゆきのしるしにや千世にひとたびすみわたるらん（新勅撰・賀、四八〇）

承保三年大井河に行幸日、内より召されける 弁乳母

うつろはで久しかるべきにほひかな盛りに見ゆる白菊の花（続後撰・賀、一三四九）

承保三年十月大井河に行幸の日、序たてまつりて 土御門右大臣（源師房）

おほる河つねよりことに見ゆるかな君がみゆきをまつにぞ有りける（続後撰・賀、一三五七）

承保二年二月大井河行幸につかうまつりてよみ侍りける 前中納言匡房

大井がは千代にひとたびすむ水の今日のみゆきにあひにけるかな（続古今・賀、一八九三）⁽⁸⁾

承保三年十月大井河の逍遙につかうまつりてよみて奉りける 大納言経信

いにしへの跡を尋ねて大井川紅葉の御舟ふなよそひせり（新千載・冬、六二三）

承保三年大井河に行幸の日よめる 大納言公実

水のあやをから紅にかけてけふの御幸にあへるもみぢ葉（新拾遺・秋下、五四一）

承保三年大井河に行幸の日よめる 中納言祐家

大井河けふのみゆきにもみぢ葉も流れ久しきみせきにぞ見る（新拾遺・冬下、五八七）

承保三年大井河に行幸の日よめる 式部卿敦賢親王

大井川みかさやまさる亀山の千世のかげみるみゆきと思へば（新拾遺・賀、七〇九）

『師実集Ⅱ』（二〇）にも、

承保二年四月十八日、清涼殿ニテ久契明月トイフ題ヲ講ゼラレケルニヨミ給ケル

チトセヘムコトハサラナリキミガヨノヒカリマサレルナツノ月カナ（師実集Ⅱ、九）

オナジトシミカリノ行幸ノ日、大井河ニテ

カメヤマノモミチバハヤク大井河ナガレタエヌニシキナリケリ（師実集Ⅱ、一〇）
と見える。⁽⁹⁾

柏木由夫氏は、橋本不美男氏の論を引きながら、②の歌について、白河院の王政復古を願う強い意志に支えられている歌と見るべきなのであるが、後拾遺集に採られている他の白河院詠にはそういう態度は見られず、平明な詠である、と指摘する。

この白河院大井川行幸に参加した公卿侍臣は多かったのであるが、和歌を詠じた人物は、白河院をはじめとして、式部卿敦賢親王、関白藤原師実、右大臣源師房、権大納言藤原俊家、権中納言藤原祐家、権中納言藤原経信、東宮学士大江匡房、右大弁藤原伊房、左中将藤原公実、弁乳母などが知られる。

*

『新古今集』（夏）に次の歌がある。

待客聞郭公といへる心を

白河院御歌

③ほととぎすまだうちとけぬ忍び音はこぬ人をまつ我のみぞ聞く（一九八）
この歌と同じ歌題の歌が、『顕季集』に次のように見える。

待客聞郭公

もろともに聞かましものをほととぎすたのめし人のはやきまさん（五七）

顕季は、⑭の歌が詠じられたときも同座したので、この歌も同じ折の可能性があらう。『顕季集』は先学の研究^⑫によると、歌の配列はほぼ編年性が認められるというが、この「もろともに」の歌の詠作年次はわからない。

『類題鈔』^⑬を見ると、

457 白川院 永保 暁 尋郭公

458 同 永暦 待客 聞郭公

459 同 永保 暮天 郭公

とある。458、459の「同」は「白川院」をさすものと思われる。つまり「白川院」主催の和歌会が457、458、459で行われた。問題は458の「永暦」とあることである。「永暦」年間は一一六〇～一一六一年に当たる。白河院は大治四年（一一二九）に崩御しているので、まったく時期的に合わない。ここは「承暦」の間違いではないだろうか。「永」と「承」の草書体は似ているので間違いやすい。

③の歌はほととぎすの忍び音を歌っているので季節は四月とならう。

以上のことより、③の詠作年次は承暦年間（二〇七七～一〇八〇）^⑭のいずれかの四月とならう。^⑮

*

『後拾遺集』（秋上）に次の歌がある。

八月ばかりに、殿上のをのこどもをめして、歌よませ給けるに

旅中聞雁といふころを

御製

④さしてゆくみちも忘れてかりがねの聞こゆる方に心をぞやる（二七七）

「旅中聞雁」という歌題を持ち、同じ折に詠まれた歌として次の歌がある。

白河院御時、上のをのこどもに、旅中聞雁と云ふことを

よませさせ給ひけるに

大藏卿匡房

夜を寒み伊勢の浜荻分けゆけばこころも雁がね聞ゆなるかな（続詞花集・秋上、二〇二）

『類題鈔』を見ると

519 白川院承暦 旅中聞雁

とある。これは承暦年間に白河院主催の和歌会があり、「旅中聞雁」題で歌が詠まれたということであろう。この『類題鈔』の記事と④の詞書や匡房の「夜を寒み」の歌を参考にと、④の歌は承暦年間（一〇七七～一〇八一）のある八月に内裏でおこなわれた歌会で詠まれたものと思われる。厳密にいうと承暦五年（一〇八一）は二月に永保に改元するので、一〇七七～一〇八〇年の期間のある八月に詠まれたということになる。詠作年次の下限は承暦四年（一〇八〇）八月となる。⁽¹⁶⁾

④の歌が詠まれた折は、白河院の他に匡房が参加していた。

*

『続後拾遺集』（夏）に次の歌がある。

位におましましける時、うへのをのこども、暮天郭公といふことを

つかうまつりけるついでに

白河院御製

⑤夕日さす空にかたらふほととぎす今日はこれこそ初音なりけれ（一八三）

右と同じ歌は『秋風集』（夏上）に次のように見える。

暮天郭公といふことをよませたまける 白川院のおほみうた

いりひさす空にこゑするほととぎすけふはこれこそ初音なるらめ（一六〇）

贈太政大臣さねすゑ

九重にまつかひありてほととぎす今ぞなくなるゆふぐれの空（一六一）

右の一六〇番歌に続く一六一番歌も同じ折の歌と思われる。作者「贈太政大臣さねすゑ」は藤原実季で、彼の兄弟である贈皇太后藤原茂子は、白河院の生母であるので、実季と白河院は、叔父、甥の関係となる。

また「暮天郭公」の題を持つ歌で同じ折に詠まれたと思われる歌として、

永保元年内裏にて、暮天郭公を 京極入道前関白太政大臣（藤原師実）

人とはでおのれぞなる郭公くれゆく空を過るひとこゑ（続千載集・夏、二五四）
がある。右と同じ歌が家集『師実集Ⅱ』には、

永保元年 月日内裏ニテ、暮天郭公

人トハデヲノレゾナノルホトトギスクレユクソヲヲスグルヒトコエ（師実集Ⅱ、一六）
とある。詞書に「永保元年」とあるので、詠作年次は永保元年ということがわかる。

その他の同じ折の歌として、『万代集』に、

永保元年内裏にて、暮天郭公といふ事を

藤原伊家

いづかたへゆくとかしらむほととぎすただひとこゑのゆふぐれの空（万代集・夏、六三七）

とあるが、右の『万代集』六三七番歌の作者「藤原伊家」は、周防守藤原公基男で母は藤原範永女、「白河天皇側近の歌人」の一人であった。また『経信集Ⅲ』にも、

暮天郭公応製

ゆふされにくもちすぐなるほととぎすよはにやなかむ深山べの里（経信集Ⅱ、五四）

同題

ほととぎすすぎゆくこゑにくれぬればよはにや聞かむ深山への里（経信集Ⅱ、五五）

とあるが、いずれも同じ折の歌と考えられる。経信の「ゆふされに」の歌の詞書に「応製」とあるので、経信のこの歌は白河院の命によって詠じられた歌ということがわかる。つまりこの歌会そのものが内裏御会であったと思われる。

⑤の五句に「初音」とあるが「初音」はその年の最初に聞く鳴き声をいうので、ここは永保元年（一〇八一）夏、四月あるいは五月に詠まれた歌であろう。この歌会に参加していたのは、白河院、藤原師実、藤原実季、藤原伊家、源経信らであった。白河院二九歳の詠。

*

『新古今集』（夏）に次の歌がある。

卯花如月といへる心をよませ給ひける 白河院御歌

⑥卯花のむらむら咲けるかきねをば雲間の月の影かとぞ見る（一八〇）

右歌は他出もなく、同歌題の歌も見出せない。

『類題鈔』に、

452 白川院永保 卯花如月

とあるが、この折の歌であろう。⑥の歌は夏に詠まれた歌なので、詠作年次は永保年間（一〇八一～一〇八三）⁽¹⁸⁾の夏の詠となるう。⁽¹⁹⁾

*

『後拾遺集』（秋下）に次の歌がある。

月前落葉といふころを

御製

⑦もみぢ葉の雨とふるなる木の間よりあやなく月のかげぞもりくる（三六二）

同題で同じ折に詠まれた歌は、次の歌があげられる。

月前落葉といへることを

源俊頼朝臣

あらしをやはもりのかみもたたるらん月にもみぢのたむけしつれば（金葉集・秋、二二七）

白河院御時、うへのをのこども月前落葉といへる心をよみ侍りけるに

橘俊綱朝臣

ひさかたの月すみわたる木枯らしにしぐるる雨はもみぢなりけり（新勅撰集・冬、三七二）

右の「あらしをや」の俊頼詠は彼の家集では、

月のまへのちるは

あらしをや葉守のかみもたたるらむ月にもみぢの手向けしつれば（俊頼集Ⅲ、五一三）

となっている。

『類題鈔』に、

542 白川院 林葉漸変

543 同永保 月前落葉

とある。543の「同」は「白川院」をさすので、543は、永保年間（二〇八一―一〇八四）に「月前落葉」題で詠じられたということであろう。

⑦の歌は秋に詠まれた歌なので、詠作年次は永保年間（二〇八一―一〇八三）⁽²⁰⁾のいずれかの秋ということになる。⁽²¹⁾

和歌を詠んだ人物は、白河院、源俊頼、橘俊綱である。

*

『金葉集』（夏）に次の歌がある。

応徳元年四月、三条内裏にて、庭樹結葉といへることをよませ給ひけるに

院御製

⑧おしなべてこずゑあを葉になりぬれば松の緑もわかれざりけり（九六）

大納言経信

たまがしは庭も葉ひろになりけりこやゆふしでて神まつころ（九七）

右の「たまがしは」の歌は、⑧の歌と並んでいるので、同じ折に詠んだ歌と考えていいだろう。この歌は『経信集Ⅲ』にも見え、詞書に歌題「庭樹結葉」が決まるまでの経緯が記されている。

応徳元年四月十八日、自内有召、於北面有御遊之次、召左中弁匡房

令献和歌題、其題云小倉山郭公、但十九日可被講者、十九日秉燭

召予被仰云、昨日題猶不快、汝可献題者、勅命難背注申之、庭樹結葉者也、

及鷄鳴被講、於東対南面有此講、上達部四五輩殿上人十余人祇候、

たまがしは庭も葉ひろになりけりこやゆふしでの神まつころ（五七）

応徳元年（一〇八四）四月十八日に、白河院より経信に招集がかかった。内裏での御遊の折、院は匡房に「小倉山郭公」という題を献上させた。しかし、翌十九日、院はその題がお気に召さず、経信に題を提出することを命じ、経信は「庭樹結葉」を献上して、その題で歌が詠まれたという話である。『匡房集Ⅰ』に、

庭の木葉を結ぶ、院のくらゐにおはしますとき、三条内裏にてよめる、

題者経信

庭のおもは月もらぬまでなりにけりこずゑに夏の日かずつもりて（七六）

とあることより、匡房もこの題で歌を詠んだのであるが、詞書に「題者経信」と書き添えている。

⑧の歌は、応徳元年（一〇八四）四月十九日に三条内裏で行われた歌会で詠まれた歌である。白河院三二歳の詠。題者は源経信。和歌を詠んだ人物は、白河院、経信（権大納言）、匡房（左大弁）である。

*

『後拾遺集』（秋上）に次の歌がある。

萩盛待鹿といふ心を

御製

⑨かひもなき心地こそすれさ牡鹿のたつ声もせぬ萩のにしきは（二八三）

⑨の他出としては、『和歌一字抄』（上二七八・下七三八）や『題林愚抄』（秋二、七三八）があるが、いずれも当該歌をもとにしたものであり、同じ折に詠まれた他の歌も記されていない。ただし、歌題「萩盛待鹿」を持つ歌として、『行宗集』に次の歌がある。

萩盛待鹿

しがらまば枝やをれむとをしけれど小萩にほへば鹿ぞこひしき（三〇一）

行宗は源基平男、行尊の弟にあたる人物である。行宗は永保三年（一〇八三）二月、二〇歳で侍従となり、三月には昇殿を許される。また応徳三年（一〇八六）正月には従五位上に叙せられる。その後、白河院の近臣となっていく。このような人物なので、⑨の歌が詠じられた時、同席したことも十分考えられよう。

以下、⑨の歌も含めて『後拾遺集』に収められた白河院詠の二八三（⑨）・三二五（⑩）・六三二（⑪）・一〇五〇（⑫）番歌には、はつきりとした年次が記されていないが、『後拾遺集』に入集していることより、『後拾遺集』が奏上（応徳三年「一〇八六」九月十六日）される以前に詠まれたものと考えられる。よって推定される詠作年次は、応徳三年九月が下限となろう。

⑨の歌は、部立が「秋上」であり、また「萩」「鹿」という題材より、秋の歌として詠まれているので、『後拾遺集』成立時期との関係から、詠作年次の下限は応徳三年（一〇八六）九月ということになる。

*

『後拾遺集』（秋上）に次の歌がある。

毎家有秋といふころを

御製

⑩宿ごとに同じ野辺をやうつすらん面がはりせぬ女郎花かな（三二五）

他出に『和歌一字抄』（上二七八、下七三六）、『題林愚抄』（秋二、七三六）があるが、それらは当該歌から採った歌であり、歌題「毎家有秋」についても参考となる資料は見出せない。

⑩の歌は「女郎花」を詠んでいる秋の歌なので、詠作年次について、『後拾遺集』成立時期との関係より考えると、その下限は応徳三年（一〇八六）九月となろう。

*

『後拾遺集』（恋一）に次の歌がある。

うへのをのこども、所の名をさぐりて、歌たてまつりはべりけるに、

あふさかのせきのこひをよませたまひける

御製

⑪あふさかのなをもたのまじこひすればせきのし水にそでもぬれけり（六三二）

詞書に「所の名をさぐりて、歌たてまつりはべりけるに」とあることより、探題が行われたことがわかる。探題とは、歌会などで各人が別々の題をくじ引きなどによって取り、その題で歌を詠むことをいう。この歌会で白河院は「逢坂関恋」題で詠作したもの。誰が参加したのかは分らない。⑪の歌は白河院在位中に詠まれたものであるが、『後拾遺集』成立時期より、詠作年次の下限は応徳三年（一〇八六）九月となろう。

なお、白河院が探題和歌を催した例として、次の歌がある。⁽²³⁾

承暦二年御前にて殿上のをのこどもさぐり題して歌つかうまつりけるに

時雨をとりて

源師賢朝臣

神な月しぐるるままにくらぶやましたてるばかりもみぢしにけり（金葉集・冬、二五七）

白河院御時、題をさぐりて殿上の人人に歌よませさせ給ひけるに、

朝霧をつかうまつりける

治部卿通俊

山里は霧立ちこめて人もなしあさたつしかのおとばかりして（続詞花集・秋上、二二三）

*

『後拾遺集』（雑四）に次の歌がある。

うへのをのこども、松澗底においたりといふ心をつかうまつりけるに

御製

⑫よろづよの秋をも知らで過ぎきたる葉がへぬ谷の岩根松かな（一〇五〇）

他出の『和歌一字抄』（上、五〇三）と『題林愚抄』（雑、九〇四六）は、当該歌から採ったもので参考とならず、他

に歌題「松澗底においたり」を詠んでいる歌も見出せない。

⑫の歌の詠作年次は白河院在位中であり、その下限は、『後拾遺集』成立時期より、応徳三年（一〇八六）九月となろう。

*

『続古今集』（秋下）に次の歌がある。

林葉漸変といへる心をよませ給ひける

白川院御歌

⑬ははそ原しぐるるかずのつもればや見るたびごとに色かはるらん（五一五）

他出として、『秋風集』（秋下）に、

林葉漸変といふことを、うへのをのこどもつかうまつりけるついでに

よませたまける

しら川の院のおほみうた

ははそ原しぐるるかずのつもればやみるたびごとに色まさるらん（四二五）

とある。また『雲葉集』（秋下）に、

林葉漸変といふことを

白川院御製

ははそ原しぐるるかずのつもればや見るたびごとに色まさるらん（七一七）

とある。

『類題鈔』に「542 白川院 林葉漸変」とあるが、⑬の歌は同じ折に詠まれたのであろう。年次に関わる記事はないが、他出の『秋風集』（四二五）の詞書に「うへのをのこども」とあることより、⑬の歌は白河院が在位していた延久四年（一〇七二）十二月から応徳三年（一〇八六）十一月の間の秋に詠まれたものであろう。⁽²⁴⁾

三一、白河上皇・法皇時代（讓位後から出家・崩御まで 応徳三（一〇八六）

一一・二六、大治四（一二二九）七・七）

ここからは、白河院が讓位して上皇と呼ばれ、さらに出家し法皇とよばれた期間を扱う。

*

『続後拾遺集』（冬）に次の歌がある。

寛治五年十月、大井河に御幸ありて、落葉滴水といふ事をよませ給うける

白河院御製

⑭大井河のせきにとまるもみぢ葉は立ちくる波に流れぬるかな（四二三）

同歌題「落葉滴水」で詠まれた歌は、

寛治五年十月、白川院、大井川に御幸せさせ給うて、落葉滴水といふことを

よませ給うけるにつかうまつりける 権中納言俊忠

大井河水の流れも見えぬまでもみぢ葉のうかぶ今日かな（新拾遺集・冬、五八八）

がある。藤原俊忠は、この時、右少将で一九歳。また、藤原顕季も

御門おりるさせ給ふて後、おほるに御幸せさせ給て、落葉滴水と

云題を読せ給しに

大井川のせきの音のなかりせば紅葉をしける渡りとやみん（顕季集、二二二）

と詠じている。

さて、この御幸のことは『後二条師通記』『中右記』の寛治五年十月一日条に次のように見える。

一日、…院（白河上皇）大井河之紅葉御覧云々、有和歌事、無序、殿下（師実）不参云々、『後二条師通記』

一日、今日御覧御馬、太上皇（白河）自鳥羽殿以御船歴覧大井河紅葉、入夜還御六条院、披講和歌、題云、落葉滴水、講師木工頭隆宗（藤原）朝臣也、『中右記』

右の記事よれば、白河院は船で大井川の紅葉の遊覧のあと、六条院で和歌会を持ち、「落葉滴水」という歌題で詠じたことがわかる。⑭の歌もこの折に詠まれた。歌を詠んだ人物は、白河院、藤原俊忠（右少将）、藤原顕季（伊予守）が知られる。白河院三九歳の詠。

＊

『風雅集』（春中）に次の歌がある。

寛治七年三月十日、法勝寺の花御覧じけるついでに、常行堂の前にて、

人人、鞠つかうまつりけるに、京極前関白太政大臣、鞠をたてまつるとて、

たづぬときくにさそはれぬ、と奏し侍りける御返し 白川院御歌

⑮山深くたづねにはこで桜花何しころをあくがらすらむ（一八一）

右歌は白河院が法勝寺の桜花を御覧になった折に、「京極前関白太政大臣」（師実）と贈答を交わしたというもの。詞書の中に、贈歌の二・三句「たづぬときくにさそはれぬ」が入っている。また、『師実集Ⅱ』には次のように一組の贈答歌として、収められている。

寛治七年三月十日、太上天皇法勝寺ノ花御覧ジケルニ、常行堂ノ前ニテ

人々鞆ツカウマツリケルニ、隨身公種ヲ御ツカヒニテ鞆ヲタテマツラセ給トテ

山ザクラタヅヌルトキハサソハレヌオヒノココロノアクガルルカナ（師実集Ⅱ、二二二）

院、御カヘシ

ヤマフカクタヅネニハコデサクラバナ何シココロヲアクガラスラム（師実集Ⅱ、二三三）

さらに、この贈答歌は『続古事談』（第二）に、

白河院、法勝寺におはしまして、花を御らんじて、常行堂の前にて、

人々、鞆つかうまつりけるに、殿より隨身公種して、鞆をたてまつりたまひて

山桜たづぬと聞けどさそはれぬ老の心のおくがるかな（七）

御返し

山深く尋ねにはこで桜花なにか心をあくがらすらむ（八）

と採られている。本来、贈答歌であった師実と白河院の歌が、贈歌と返歌がそれぞれ単独で勅撰集や私撰集等にとられるようになった。白河院の返歌は、『万代集』（春下）に、

北山の花御覧じけるととき、京極前関白太政大臣、歌をたてまつりて侍りけるに

白河院御製

山深くたづねにはこで桜花何しころをあくがらすらむ（万代集・春下、二八八）

と見える。師実の贈歌は、『千載集』（春上）に、

白川院、はな御らむじにおましましけるに、めしなかりければ、

よみてたてまつり侍りける

京極前太政大臣

山ざくらたづぬときくにさそはれぬ老のこころのあくがるるかな（四三）

と見える。

古記録においても師実の贈歌は『中右記』寛治七年三月八日条に、

今日上皇有御幸法勝寺、是為御覽新御塔之處也、其次於常行堂前庭、人々有上鞠之興、前驅或布衣、依御覽白河
当辺之山花也、午後大雨、則還御、関白殿以御隨身右近番長秦公胤令進鞠給、則相具有御歌、詞云、

山桜尋ヌトキケドサソハレヌオイノコロモアクガレニケリ

と見える。

さて、白河院の贈答歌は、現段階においてこの一組だけである。内容的には師実が「誘われないから心がさまよう」と恨み歌の形で詠んだのに対して、白河院は「尋ねてくれればいいのに」と歌を返す。その実、友好関係が見られる贈答と思われる。

⑮の詠作年次について、各歌集は「寛治七年三月十日」とするが、『中右記』の記事より「寛治七年三月八日」とするのが正しいと思われる。それは次の⑯の歌の内容が、「寛治七年三月十日」に白河院一行が北山へ花見に行くという話なので、⑮の詠作年次は「三月八日」であると思われるのである。

歌を詠んだ人物は、白河院、藤原師実。白河院四一歳の詠。

*

『詞花集』（春）に次の歌がある。

処処花をたづぬといふことをよませたまひける 白河院御製

⑯春くれば花のこずゑにさそはれていたらぬ里のなかりつるかな（二七）

同じ歌が『後葉集』（春上）に、

所所に花をたづぬといふことをよませ給ひける 堀河院御製

春くれば花のこずゑにさそはれていたらぬ里のなかりつるかな（四二）

と見えるが、作者名が「堀河院御製」となっているのが不審。

同じ折にこの歌題「処処花をたづぬ」で詠まれた歌は、『新勅撰集』（春上）に、

寛治七年三月十日、白河院、きた山の花御覧じにおはしましける日、

処処尋花といへる心をよませたまうけるに 久我太政大臣（源雅実）

山ざくら方もさだめずたづぬれば花よりさきに散る心かな（五五）

右衛門督基忠

春はただゆかれぬ里ぞなかりける花のこずゑをしるべにはして（五六）

と見える。右の「山ざくら」の歌の作者「久我太政大臣」とは右大臣源頼房男雅実のことである。続く「春はただ」の歌も同じ折の詠と考えられる。その作者「右衛門督基忠」とは大納言忠家男藤原基忠のことで、⑭の歌で登場した俊忠の兄に当たる。また、『新拾遺集』（下）にも、

寛治七年三月十日、白河院、北山の花御覧じにおはしましたりける日、

処処尋花といへる心をよませ給うける 贈左大臣長実

尋ねつけふ見ざりせばさくら花ちりにけりとやよそにきかまし（一六四）

と見える。作者の「贈左大臣長実」は、藤原頼季男長実。白河院近臣の一人。この時、因幡守であつた。また『秋風集』（春下）に、

寛治七年三月十日、しら川の院、北山の花御覧し侍りけるに、

処処尋花といふことを

贈太政大臣つねざね

いづかたもあかぬころに桜花たづねぬ山の春はなきかな（六八）

と見える。作者「贈太政大臣つねざね」は藤原師実男経実のこと。この時、参議であつた。匡房もその家集『匡房集Ⅱ』に、

所々尋花

桜花四方のしら雲一色にあしげの駒の跡も定めず（一二）

と詠んでいるが同じ折の詠であろう

なお、『和歌一字抄』（上）に次のように、「六条右大臣」（源顕房）の詠もあげられているが、後述する『中右記』の記事から同じ折に詠んでいたとみてよからう。

処処

処処尋花

白河院御製

春くれば花の匂にさそはれていたらぬ里のなかりけるかな（五四六）

六条右大臣（源顕房）

よしの山谷がくれなる花ならでけふは尋ねぬ所あらじな（五四七）

匡房

桜さく四方の白雲一かたにあし毛の駒の宿も定めず（五四八）

以上同座

『中右記』寛治七年三月十日条には、この白河院御幸について、次のように記されている。

十日、太上皇為一條北辺花御覽有御幸、巳時許先御東北院、次御覽（令子内親王）齋院花、次鳥羽殿、入夜還御六條殿、右大臣以下公卿五六人扈從皆以直衣、但中納言中将一人布衣、殿上人或布衣或衣冠、於六條殿小寝殿西面披講和歌、題云、處々尋花、講師木工頭隆宗朝臣、読師源大納言、雅、御製講師右大弁云々、

右記事に「右大臣以下公卿五六人扈從：」とあることより、右大臣顕房も参加したことが知られる。白河院一行は、東北院、齋院、鳥羽殿の桜を見てから夜になって六条殿に戻り和歌会をもった。

⑯の歌の詠作年次は寛治七年三月十日、歌を詠んだ人物は、白河院、源顕房（右大臣）、源雅実（権大納言）、藤原基忠（権中納言）、藤原経実（参議）、大江匡房（参議）、藤原長実（因幡守）など。白河院四一歳の詠。

*

『金葉集』（秋）に次の歌がある。

寛治八年八月十五夜、鳥羽殿にて、翫池上月といへることをよませ給ひける

院御製

⑰池水にこよひの月をうつしもてこころのままにわが物と見る（一八〇）

大納言経信

てる月の岩間の水にやどらずはたまゐるかずをいかで知らまし（一八一）

右歌は寛治八年（一〇九四）八月十五日、鳥羽殿にて、観月の会があり、歌題「翫池上月」で詠まれた歌で、白河院と経信の歌が並んで収められている。他にこの時に詠じられた歌が勅撰集にいくつか見える。俊忠は、

寛治八年、鳥羽殿にて、翫池上月といへるこころを 権中納言俊忠

のどかなる光をそへて池水に千代もすむべき秋の夜の月（続拾遺集・賀、七四〇）

と詠じた。俊忠はすでに⑭の歌が詠じられた時、登場している。公実も次のように詠んでいる。

寛治八年八月十五夜、鳥羽殿にて、翫池上月といへる心を　大納言公実

夜とともにさわがぬ池の水なればのどかにぞすむ秋の月影（続後拾遺集・賀、六一九）

公実は②の歌が詠じられた折にも登場している。藤原忠実は、

寛治八年八月十五夜、鳥羽殿にて、翫池上月といへるころを

富家入道前関白太政大臣（藤原忠実）

いくかへりすまんとすらむ池水はうつれる月の影ものどけし（新千載集・慶賀、二二二五）

と詠じた。忠実は時に権中納言であった。

私家集においても、この歌会での詠を見いだすことができる。⑰の歌と並べられていた経信詠はその家集『経信集

Ⅲ』に、

八月十五夜、鳥羽殿にて、池上月有序

てる月の岩間の水にやどらずはたまゐる数をいかで知らまし（一一三）

とある。詞書に「有序」とあることより、経信はこの会で序を書いたことがわかる。この序は、『本朝文集』（巻

五十）に「八月十五夜待^ニ太上皇鳥羽院^ニ同詠^レ翫池上月^ニ」^一応^レ制和歌序[」]と題して載っている。『師実集Ⅱ』では、

嘉保元年八月十五夜、鳥羽殿ニテ、池上月

オホゾラハイケノオモテニクモリナクコヨヒハミチテスメル月カナ（二四）

とあり、『匡房集Ⅰ』には、

鳥羽殿のいけのうゑの月

池水にうつれる月ぞさだめなきすむとやいはんやどるとやいはん（一〇二）

とある。それらの私家集に記されている歌題は「池上月」であるが、勅撰集の「翫池上月」と同じ折のものと考えられる。それは、経信詠「てる月の」の歌が『金葉集』と『経信集Ⅲ』の両方に載っていることと、『経信集Ⅲ』の「てる月の」の歌の詞書に「池上月有序」とあり、この序が載っている『本朝文集』の中で「詠^レ翫^二池上月^一」^レ応^レ制和歌序」とあることより、同じものと考えていいだろう。

また、『袋草紙』（上巻）に、⑪の歌と経信の「てる月の」の歌がエピソードとして載っている。

白川院、鳥羽殿における九月十三夜の「池上の月」の和歌に、序者経信卿の歌に云はく、

てる月のいはまの水にやどらずは玉あるかずをいかでしらまし

「池」の字なきの由をもつてこれを傾く。俊頼語りて云はく、「この由、経信云はく、「しかいふなりにや」とて他の答なし」と云々。

同じ和歌の御製に云はく、

池水にこよひの月をやどしてもて心のままにわがものとみる

これは女房堀川殿大宮右府の女の歌なり。而して内々に今日の和歌いかかと御尋ねの処に、この歌を申すなり。秀逸の歌なり。仍りて仰せに云はく、「汝が歌に似ず、我が歌になすべし」とて御製となると云々。

⑪の歌に関する記事を見ると、この歌は堀河殿（大宮右大臣藤原俊家女）の歌であったが、秀歌であるので、白河院が自分の歌にしてしまったという話である。事の真偽はともかく、この時の被講の様子は『中右記』寛治八年八月十五日条に次のように記されている。

十五日、天晴、……夜及三半從御船令上給了、於女院御方東面、被講和歌、題云、翫池上月、序題帥、予勤仕講師、左大臣為読師、講大納言了後、頃而頗遅々、是左大臣與関白殿歌次第之事也、依大殿命先講関白殿歌、次左大臣、次大殿、此間女房從簾中被出三首歌、書薄様三重、被置扇上、扇銀骨、書畱殊妙、同講之、皆以秀歌也、人々感歎、爰從簾中給御製於関白、〃〃傳獻大殿、便宜也、大殿令気色、講師起座、撤臣下歌、召新中納言通俊卿被講御製、誠以優妙也、不足嗟歎、満座諷詠、及曉更各々分散、

通俊が御製を被講したところ、誠に優妙であり、皆で詠じたということである。

『中右記』の記事によると、関白（師通）や左大臣（俊房）も歌を詠んだとするが、その歌は伝わっていない。現段階で歌が残っているのは、白河院、師実（大殿）、経信（大納言）、公実（権中納言）、忠実（権中納言）、匡房（権中納言）、俊忠（左少将）。白河院四二歳の詠。

*

『金葉集』（春）に次の歌がある。

宇治前太政大臣京極の家の御幸

院御製

⑱ 春がすみたちかへるべき空ぞなき花のにほひにこころとまりて（三五）

右歌は白河院が十種供養の行われた藤原師実第京極殿へ御幸をした折、詠まれたものである。花のすばらしさに帰るそももないよと、師実の法会のすばらしさをたたえている。この十種供養は師実主催の行事であり、盛大に行われた。歌集や史料にその記事が多く採られている。『千載集』（春上）には、

京極の家にて十種供養し侍りける時、白河院みゆきせさせたまひて、

又の日歌たてまつらせ給ひけるによみ侍りける 京極前太政大臣（藤原師実）

さくら花おほくの春にあひぬれど昨日けふをやためしにはせん（五〇）

後二条関白内大臣（藤原師通）

はなざかりはるの山べをみわたせばそらさへにほふ心ちこそすれ（五一）

右衛門督基忠

さきにほふ花のあたりは春ながらたえせぬやどのみゆきとぞみる（五二）

と見え、師実・師通父子の詠がある。それに「右衛門督基忠」の詠が続く。基忠は俊忠の兄で⑬の歌のところでも詠作している。師実の「さくら花」の歌は、『師実集Ⅱ』にも、

嘉保三年二月廿二日、太上皇、上東門亭ニ幸シタマヘリケル時、翫花

トイフ事ヲ講ゼラレケルニ

サクラバナオホクノハルニアヒヌレドキノフケフヤタメシニハセム（二七）

と見える。「太上皇」（白河院）が「上東門亭」^⑭（京極殿）に御幸したことが記されている。『続詞花集』（春下）にも、

京極の家に白河院みゆきさせ給ひて又の日、人人に歌よませさせ給ひけるに

京極前太政大臣

桜花おほくの春にあひぬれど昨日今日をやためしにはせん（三九）

と見える。さらに「堀河左大臣」（源俊房）は『新古今集』（雑上）に、

京極前太政大臣家に、白河院みゆきし給ひて、又の日、

花歌たてまつられけるによみ侍りける
堀河左大臣（源俊房）

老いにけるしらも花もろともにけふの御幸に雪と見えけり（一四六一）

と詠じている。なお、俊房はこの和歌会で序題を書いている。⁽²⁶⁾ また、『顕季集』に、

二月二十二日、京極殿に御幸ありしに、またの日、花をもてあそぶと
いふ題をよまれしに

桜花にほふさかりの宿なればなほをりてこそ見まくほしけれ（二一九）

とあり、『匡房集Ⅰ』にも、

京極殿のみゆきに、花

きみが代に千歳をふべきさくらばな色ものどかに見えまがふかな（二一八）

とある。『和漢兼作集』（春中）に、

白河院、京極前関白家に御幸ありて、人人翫花といふことを

つかうまつりけるに

権中納言藤原季仲

千代ふべき宿のしるしの花の色もけふのみゆきにほひそひつつ（二六四）

とある。作者藤原季仲は、参議で左大弁。漢詩人でもあった。

京極殿の十種供養について、『中右記』『後二条師通記』『百鍊抄』などにその記事が載っているが、ここは『中右記』永長元年二月二十二日条をあげると、

廿二日、癸未、天晴、今日於京極殿御堂有十種供養、兼日作式、如大法会歟、為法会光華上皇並女院有御幸、已時許人々参集六条殿、午時御出、……

とあり、二十二日に行われた十種供養という法会を華やかにするために、白河院は郁芳門院とともに京極殿に御幸するとある。翌二十三日条には和歌会の様子が詳しく記されている。

……左大臣書和歌題入柳筥覧上皇、御覧之後返給、一〃見下、律、青柳・万歳楽、御遊了人々進和歌、文臺御硯筥蓋、公卿十九人皆悉進歌、殿上人十二人依選進和歌、修理大夫頭季朝臣・頭弁師頼〃〃・頭中将国信朝臣・右大弁基綱朝臣・宗忠・四位少将能俊朝臣・新中将忠教朝臣・權中将顯実朝臣・藏人少納言成宗・兵衛佐師時・判官代若狭守顯隆・院藏人秀才実光、召頭弁師頼為講師、左大臣為説師、左大臣序題優美之由人々感歎、女房歌二首、臣下之歌講了後有御製、召權中納言匡房卿為講師、御製之趣神也妙也、上下群臣皆以感歎、後代美談何事如之哉、……

左大臣俊房が序題をものし、公卿十九人、殿上人十二人が詠進した。女房和歌も二首詠進されたとある。臣下の被講がおわると、匡房を講師として御製が被講された。「御製之趣神也妙也、上下群臣皆以感歎」とあるように、御製のすばらしさに皆感心したとある。この⑮の歌は、永長元年（一〇九六）二月二十三日に詠まれた歌で、白河院は師実の法会をたたえている。この和歌会では多くの歌が詠進されたが、残っているのは、白河院、師実（前太政大臣）、師通（関白内大臣）、俊房（左大臣）、基忠（權中納言）、藤原季仲（左大弁）の歌である。白河院四四歳の詠。

*

『千載集』（春下）に次の歌がある。

鳥羽殿におはしましけるころ、常見花といへる心ををのこども
つかうまつりけるついでに、よませ給うける
白河院御製

⑮ 咲きしより散るまで見れば木のもとに花も日かずもつもりぬるかな（七七）

右歌の歌題について、他出の『題林愚抄』（春三、九一四）は『千載集』から採ったので「常見花千」となっているが、同じく他出の『和歌一字抄』（上）は「逐日看花」となっている。同歌であるのに、歌題が違っている。

⑮の歌は、『中右記』永長元年三月一日条に載っている。その記事の中、鳥羽殿における和歌会の部分をあげる。

午時許参鳥羽殿、依夜前召也、直衣、干時上皇乘御船令廻風池、……………

…秉燭之後、管弦之人祇候御前、……………此間人々且進和歌、題者江中納言、申時以後被出也、遂日看歌、……………

…御遊了後召下官為講師、序者院藏人縫殿助藤実光、秀才、春日侍鳥羽院詠遂日看花応製和歌一首、臣上字皆書也、但他人只詠和歌許、不書臣上字、中宮大夫為読師、漸講和歌之處、中宮大夫歌與頭輔朝臣歌一字不誤相合、又女房歌三首書色リ薄様、講了欲立座處有勅、被仰云、近日每日有此和歌興、御製講師不可用他人、汝同可勤仕、則奉仰又復座、披見御製講之處、已合愚歌、天氣令咲御、満座之人為言、一者面目也、以愚慮及高情、一者恐懼也、以拙詞叶御製、進退惟谷、身心失度、已及深更事了、人リ退出、與治部卿同車帰洛、下官歌云、フクカゼニチリクルハナモミルヒトノヒカズモトモニツモルハルカナ、依叶御製被書留也、

御製云、サキシヨリチルマデミレバコノモトニハナモヒカズモツモルナリケリ

題者は匡房で歌題は「遂日看花」、序者は院藏人藤原実光であつた。『中右記』の作者藤原宗忠は講師となる。和歌を被講する段になつて、中宮大夫（師忠）の歌と頭季の歌が一字も違うことなく、同じ歌であつたということである。宗忠は被講が終えたので座を立とうとしたら、白河院から毎日和歌会はあるので、御製の講師を命じられた。宗忠は御製を披見し被講しようとしたら、自分の歌と御製とが歌詞と内容があまりにも合致していたことに気づいた。白河院はお笑いになつていらつしやつたが、本人はおそれおかしこまつた。自分の拙い歌が御製と同じ趣向であつたことに一方では名譽なこととも思つたが、一方ではおそれおかしことだと思ひ、進退これきわまつた状況で心身の喪失状態であつたというが、最後に自分の歌を書き留めたということである。

ということ⑬の詠作年次は永長元年（一〇九六）三月一日である。

*

白河院が熊野御幸の折、詠じた和歌は、以下にあげた②①②の三首である。それぞれの歌について考証する前に、白河院の熊野御幸についていうと、白河院は生涯、九回熊野へ御幸した。⁽²⁷⁾それぞれの御幸における、京都を進発した日と熊野へ到着した日を示すと、次の通りである。

①寛治四年（一〇九〇）一月二十二日進発、二月十日着

②永久四年（一一一六）十月二十六に進発、十一月十一日？着

③永久五年（一一一七）十月二十二日進発、十一月六日着

④元永元年（一一一八）閏九月七日進発、閏九月二十一日着

⑤元永二年（一一一九）九月二十七日進発、十月九日着

⑥保安元年（一二二〇）十月三日進発、十月十五日着

⑦天治二年（一二二五）十一月九日進発、十一月二十三日着

⑧大治二年（一二二七）二月三日進発、二月十八日着

⑨大治三年（一二二八）二月十三日進発、二月二十六日着

以下、②①②の歌について、明確な特定には至らなかったが、参考として見通し（年次の候補）を示した。

『新古今集』（神祇）に次の歌がある。

熊野へまうでたまひける時、みちに花のさかりなりけるを御覧じて

白河院御歌

②さきにほふ花のけしきをみるからに神の心ぞ空に知らるる（一九〇六）

この歌は、詞書に「みちに花のさかりなりけるを」とあり、初二句で「さきにほふ花のけしきを」とあることより、桜の咲いている時期に御幸したことがわかる。よって詠作年次の候補は、189に絞られる。

次に『新千載集』（冬）に次の歌がある。

熊野に御幸の時よませ給うける

白河院御製

⑭おきつ風吹あげの千鳥夜やさむき明がたちかき波に鳴くなり（六五九）

⑮の歌は、冬の部立に入っており、千鳥が歌われていることから、この歌は冬の詠であると考えられる。よって、詠作年次の候補は237に絞られる。

最後に『新後撰集』（羈旅）に次の歌がある。

熊野にまゐらせ給うける時、よませ給うける

白河院御製

⑯山のはにしぐるる雲をさきだてて旅の空にも冬は来にけり（五五九）

⑯は「しぐるる雲」「冬は来にけり」とあることより、季節は初冬と考えられる。よって、詠作年次の候補は56に絞られる。

三―三、詠作年次未詳和歌

次の⑳㉑の歌はいずれも『金葉集』に収められている。『金葉集』の成立は大治二年（一一二七）ころとされてい

るので、いずれの歌も大治二年の『金葉集』成立以前の詠じられたことは確かであるが、詳しい年次はわからない。
白河院の崩御された年とも近いことから年次未詳歌としたい。

柳糸随風といふことをよませ給ひける
院御製

②③ 風ふけば柳のいとかたよりになびくにつけてすぐる春かな（金葉集・春 二二三）

ほととぎすをまつといへることをよませ給ひける
院御製

②④ ほととぎすまつにかかりてあかすかな藤の花とや人の見るらん（金葉集・夏 一一六）

*

以下にあげる②⑤～②⑧の歌は、まったくの詠作年次不詳の歌である。

『続古今集』（秋下）に次の歌がある。

晩風知菊といふころを
白川院御歌

②⑤ タぐれに風の吹かずは菊の花にほふまがきをいかで知らまし（四九八）

他出として『雲葉集』（秋下）に、

晩風知菊といふことを
白川院御製

ゆふぐれに風の吹かずは菊の花にほふまがきをいかで知らまし（六五九）
と見える。

*

『続千載集』（春下）に次の歌がある。

題しらず
白川院御製

②⑥ 嶺つづきにほふさくらをわが物と折りてやきつる春の日ぐらし（一二二）

左京大夫頭輔

をしむとていく日もあらじ山桜こころのままにをりてかへらむ（一二三）

②⑥の他出として、『雲葉集』（春中）に、

花御歌の中に

白河院御製

みねつづきにほふ桜をわがものとをりてやきつる春のひぐらし（一五六）
とある。②⑥の歌と並んでいる「をしむとて」の歌は他出等見出せない。

*

『新後拾遺集』（春下）に次の歌がある。

題しらず

白河院御製

②⑦ 白雲のたえまにかすむ山桜色こそ見えねにほふ春風（九五）

*

『続詞花集』（冬）に次の歌がある。

（題しらず）

白河院御歌

②⑧ 跡もなく雪降りつもる山路をば我ひとり行くこころこそすれ（三二二）

*

最後に『皇室文学大系』で、白河院詠とされてきた和歌④⑤について、考証を加える。

先ず、『新古今集』（夏）の二四九番歌に次の歌がある。

題しらず

白河院御歌

④にはの面は月もらぬまでなりにけりこずゑに夏の影しげりつつ（二四九）
すでに⑧の歌のところでとりあげたが、『匡房集Ⅰ』に、

にはの木はをむすぶ、院のくらゐにおはしますとき、三条内裏にて

よめる、題者経信

にはのおもは月もらぬまでなりにけりこずゑに夏の日数つもりて（七六）

と見える。この歌は応徳元年四月十九日に三条内裏で詠まれた歌で、その時、白河院も⑧の歌を詠じているのである。
『和歌一字抄』（上）では、次のように白河院詠（⑧）と匡房の歌が並記されている。

庭樹陰葉

白河院御製

おしなべて梢葉びろに成りぬれば松のみどりもわかれざりけり（五五九）

同

匡房

庭の面は月もらぬまで成りにけり梢に夏の日数つもりて（五六〇）

よつて④の歌は匡房詠であり、間違つて『新古今集』に入集したものと思われる。⁽²⁹⁾

*

『新千載集』（春上）に次の歌がある。

藤原範永朝臣、ひさしくまゐらざりければ給はせける 白河院御製

⑥春といへば花やかをると山桜みるべき人のたづねこぬかな（九六）

同じ歌が『万代集』（春上）に、

範永朝臣ひさしくまぬらざりければ、たまはせける 白河院御製

はるくれば花やかはるとやまざくら見るべき人のたづねこぬかな（二〇一）
とあり、さらに『範永集』に、

ひさしうまいらざりけるに、しらかはの院よりおほせられたる

はるやくれ花やかはれるやま桜見るべき人のたづねこぬかな（一五二）

かへし

ゆかねども霞へだてし山ざくら花によそなるころならねば（一五三）
と見える。

右の三つの歌集においてその成立を早いものからいうと、『範永集』『万代集』『新千載集』の順となる。

もともと「はるやくれ」の歌は『範永集』にあった。『万代集』の撰者は、その詞書「しらかはの院」を白河院自身と解し、初二句に手を入れ、白河院御製として『万代集』に載せたのであろう。さらに『新千載集』の撰者は、『万代集』を参考として詞書はそのまま使い、初二句に手を入れて、白河院御製とした。

問題は詞書の「しらかわの院」を白河院自身と解したことによる。

『範永集』の一五二・一五三番の贈答歌は、実は上東門院と範永の贈答歌なのである。「しらかわの院」というのは、人物の呼称でなく、上東門院が住んでいた邸第の名称なのである。⁽³⁰⁾このところを誤って白河院自身ととり、③の歌は白河院御製となったものであろう。

以上より、④⑤の歌は白河院詠から外すべきである。

四、白河院の和歌詠作年表

白河院の詠作年次が判明した歌を中心に、白河院の年表を以下に示す。白河院の天皇在位期間と上皇・法皇期間とは四角で囲んだ。

天皇	元号	改元月	西暦	歳	月日	詠作年次判明和歌、白河院事蹟
後冷泉	天喜元	1	一〇五三	一	6・19か20	尊仁親王第一皇子（貞仁・白河天皇）誕生。
	延久元	4	一〇六九	一七	4・28	貞仁親王、東宮となる。
白河	承保二		一〇七五	二三	12・8	後三条天皇讓位、貞仁親王（白河天皇）受禪。
					4・18	①玉葉集・賀・一〇六八
				9月		後拾遺集撰集下命。
	承保三		一〇七六	二四	10・24	②後拾遺集・冬・三七九（大井川御幸和歌）
	承暦二		一〇七八	二六	4・28	承暦二年四月二十八日内裏歌合
					4・30	承暦二年四月三十日内裏後番歌合
	承暦三		一〇七九	二七	7・9	白河天皇第二皇子（善仁・堀河天皇）誕生。
	承暦四		一〇八〇	二八	4月	③新古今集・夏・一九八（詠作年次下限）
				8月		④後拾遺集・秋上・二七七（詠作年次下限）
	永保元	2	一〇八一	二九	4か5月	⑤統後拾遺集・夏・一八三

堀河									
永保三	一〇八三	三一	夏	(6) 新古今集・夏・一八〇	詠作年次下限				
応徳元2	一〇八四	三二	4・18	(7) 後拾遺集・秋下・三六二	詠作年次下限				
応徳三	一〇八六	三四	9・22	(8) 金葉集・夏・九六					
			9月	中宮賢子崩御。					
				(9) 後拾遺集・秋上・二八三	詠作年次下限				
				(10) 後拾遺集・秋上・三一五	詠作年次下限				
				(11) 後拾遺集・恋一・六三二	詠作年次下限				
				(12) 後拾遺集・雜四・一〇五〇	詠作年次下限				
				後拾遺集奏上。					
			9・16	(13) 続古今集・秋下・五一五	詠作年次下限				
			秋						
寛治四	一〇九〇	三八	1・22	善仁親王を東宮とし、白河天皇讓位、善仁親王(堀河天皇)受禪。					
寛治五	一〇九一	三九	10・1	上皇、熊野へはじめて御幸。(20か)					
寛治七	一〇九三	四一	3・8	(14) 続後拾遺集・冬・四二三					
			3・10	(15) 風雅集・春中・一八一					
				(16) 詞花集・春・二七					
				郁芳門院媞子内親王根合					
嘉保元12	一〇九四	四二	8・15	(17) 金葉集・秋・一八〇					

崇徳	鳥羽	高陽院七番歌合
嘉保二	嘉保二	上皇、鳥羽殿で前裁合を行う。
永長元12	永長元12	⑮金葉集・春・三五
		⑯千載集・春下・七七
		郁芳門院媿子没。
		郁芳門院の死により、白河上皇出家。
康和五	康和五	堀河天皇第一皇子（宗仁・鳥羽天皇）誕生。
永久四	永久四	堀河天皇崩御、宗仁親王（鳥羽天皇）践祚。
永久五	永久五	法皇、熊野へ御幸。（⑮か）
元永元4	元永元4	法皇、熊野に御幸。（⑮か）
元永二	元永二	法皇、熊野に御幸。（⑮か）
保安元4	保安元4	法皇、熊野へ御幸。（⑮か）
		法皇、藤原忠実の内覧を停止する。
保安四	保安四	鳥羽天皇讓位、顕仁親王（崇徳天皇）受禪。
天治元4	天治元4	この年、金葉集撰集下命。
天治二	天治二	白河法皇・鳥羽上皇・待賢門院が熊野へ御幸。（⑮か）

大治二	一一二七	七五	2・3	法皇・上皇・待賢門院が熊野へ御幸。 この年あたりに金葉集奏上。	(20)か
大治三	一一二八	七六	2・13	法皇・上皇・待賢門院が熊野へ御幸。	(20)か
大治四	一一二九	七七	7・7	白河法皇崩御。	

五、まとめ

以上、白河院の詠歌二八首の詠作年次を特定することを中心に集成と考証したことより、見えてきたことを整理し、まとめとする。

白河院の和歌を三つに分けたが、それぞれの区分で詠まれた歌を示すと次の通りである。

三―白河天皇時代（在位期間）

一三首〔①～⑬〕

- (①) 「久契明月」中殿御会 玉葉集
- (②) 大井川行幸和歌 後拾遺集
- (③) 「待客聞郭公」新古今集
- (④) 「旅中聞雁」御会 後拾遺集
- (⑤) 「暮天郭公」内裏御会 続後拾遺集
- (⑥) 「卯花如月」新古今集
- (⑦) 「月前落葉」御会 後拾遺集
- (⑧) 「庭樹紅葉」三条内裏 金葉集
- (⑨) 「萩盛待鹿」後拾遺集
- (⑩) 「毎夜有秋」後拾遺集
- (⑪) 探題和歌 後拾遺集
- (⑫) 「松老潤底」後拾遺集

〔13〕「林葉漸変」続古今集

三―二白河上皇・法皇時代 讓位後から出家、崩御まで 九首〔14〕②〕

〔14〕「落葉滴水」寛治五年大井川御幸 続後拾遺集 〔15〕法勝寺御幸 風雅集

〔16〕「処処尋花」北山御遊覽御幸 詞花集 〔17〕「翫池上月」鳥羽殿御会 金葉集

〔18〕京極殿十種供養 金葉集 〔19〕「常見花」千載集

〔20〕〔21〕〔22〕熊野御幸和歌 新古今・新千載・新後撰集

三―三 詠作年次未詳和歌

六首 〔23〕②⑧

右表によると、「三―一白河天皇時代」つまり在位期間に、白河院は二八首中、一三首と最も多くの歌を詠じている。天皇という立場で行事や内裏の歌会など、歌を詠む機会が多かったのであると思われる。①の中殿御会や②の大井川行幸和歌その他⑤や⑧は、比較的大きな規模の行事であり、その年次も詞書に記されている。しかし年次も記されていない③、④、⑥、⑦、⑬の歌は、『類題鈔』により、その歌の詠作年次の期間が特定できて、白河天皇在位時の歌に入れることができた。その結果、在位時に多く詠じられたことがわかった。

「三―二白河上皇・法皇時代」は、九首の歌が詠じられた。三―一とくらべて詠歌の数は少ないが、上皇時代は、⑮の法勝寺御幸や⑱の京極殿十種供養の歌など行事において詠まれた歌が目立つ。また、出家してからの法皇時代を中心として熊野御幸での三首が確認できる。

白河院における一生涯を通じての詠歌状況をみると、在位時代、上皇時代までは、行事や御会等で歌を詠んでいるが、出家以後の法皇時代は、残存する歌が非常に少ないことが明らかになった。

次に同じ折に歌を詠んだ歌人についてみると、目立つのは、

師実 ①、②、⑤、⑮、⑰、⑱

経信 ①、②、⑤、⑧、⑰

匡房 ②、④、⑧、⑮、⑰、⑱

の三人である。師実は摂関家としての歌合や歌会を主催する一方、天皇家の歌会等にも顔を頻繁に出している。経信、匡房といった当時の代表的歌人も歌を詠じているが、二人は和漢に通じていて、白河院主催の歌会などの序者として和歌序を書いたり、題者として歌題を提供したりしている。また官僚としても力量のある人物であり、白河院に近い人物であった。

その他の人物では、藤原顕季が三回（③、⑭、⑱）、公実が二回（②、⑰）同座している。白河院の近臣といわれている人物である。

一方、白河院主催の晴儀の『承暦二年（一〇七八）四月二十八日内裏歌合』の判者をした、村上源氏の右大臣源顕房やその兄左大臣俊房はそれぞれ一度だけ歌を詠んでいるにすぎない。

白河院の和歌二八首について、詠作年次を中心に考察を試みた。大ざっぱではあるが、院の歌の詠作年次が特定でき、院の生涯における詠歌状況も明らかにすることができた。また院と関わりを持った人物についても言及することができた。

今後は、本稿の結果をもとに、天皇家や摂関家両家の関係が融和的であるという視点をもって、白河院の和歌の詠

みぶりや御会などの動向がどう変化をしたかについて明らかにしていきたい。

〔注〕

- (1) 近年の歴史学の研究によれば、後三条天皇即位以後、摂関家が天皇の外戚関係を喪失し、権力を衰退させたといわれることに對して、後三条と摂関家との関係はむしろ良好な関係にあったことが指摘されている。(樋口健太郎氏『中世摂関家の家と権力』(校倉書房 二〇二一年) など)。
- (2) 上野理氏『後拾遺集前後』(笠間書院、一九七六年)。
- (3) 拙稿「源顕房の詠歌―集成と考証―」(『総研大文化科学研究』第一六号 二〇二〇年三月)。拙稿「歌合判者としての源顕房」(『総研大文化科学研究』第一七号 二〇二二年三月)。
- (4) 本稿の白河天皇の呼称についてであるが、在位中は白河天皇、讓位後は白河上皇、出家後は白河法皇というようにその折ごとに言い分けするのが本来は正しいのであろうが、基本的に白河院と呼ぶこととする。年表においては、白河天皇、白河上皇、白河法皇とした。その他、状況によっては、白河院以外の呼び方もしたところもある。
- (5) 名著普及会、一九七九年。「列聖全集」復刻版。
- (6) 以下、『師実集Ⅱ』は、久保木哲夫・加藤静子氏『藤原頼宗集 師実集 全釈』(花鳥社 二〇二二年)を参考とした。
- (7) 橋本不美男氏『院政期の歌壇史研究』(武蔵野書院 一九六六年) 参照。
- (8) 同じ歌が『万代集』(賀、三七八五)に見える。その詞書は「承保三年大井河に行幸の日、つかうまつりける」

となっていることより、『続古今』（賀、一八九三）の「承保二年二月」は誤りであろう。

- (9) 「カメヤマノ」の歌の詞書は「オナジトシ」とある。前の歌の詞書「承保二年四月十八日」を受ければ、承保二年という意になるが、ここは状況から考察すると、承保三年の詠と考えられる。

- (10) 柏木由夫氏『金葉集』の白河院と堀河院』（『和歌文学論集6 平安後期の和歌』 風間書房 一九九四年）。
- (11) 注7 参照。

- (12) 川上新一郎氏『六条藤家歌学の研究』付論「藤原顕季伝の考察」（汲戸書院、一九九九年）等。

- (13) 「類題鈔」研究会編『類題鈔（明題抄）影印と翻刻』（笠間書院 一九九四年）。この本により、今まで年次未詳だった歌がいつ頃詠まれたか特定できるようになった。④⑥⑦⑬など。『後拾遺集』諸注釈はこれらの歌について「小歌会をもったのだろう」とするが、ある程度の規模の歌会だったのではないだろうか。

- (14) 承暦五年（一〇八一）は二月に永保に改元している。

- (15) 本稿では、年表に詠作年次を入れる場合、期間が限定されているものは、基本的に下限の年次をいれた。

- (16) 注15 参照。

- (17) 『平安時代史事典』の「藤原伊家」（上野理氏執筆）の項目による。

- (18) 永保四年（一〇八四）は二月に応徳に改元している。

- (19) 注15 参照。

- (20) 注18 参照。

- (21) 注15 参照。

- (22) 酒井美穂氏「源行宗年譜」（『立教大学日本文学』第六四号 一九九〇年七月）。

(23) 両歌とも承保二年（一〇七五）九月内裏歌合に入っている。

(24) 注15参照。

(25) 注6参照。

(26) 俊房は「春日待太上皇幸上東門第翫花応製和歌一首並序」という題で序を書いている。『扶桑古文集』（大日本史料所引）。

(27) 参考…日本古典文学大系『愚管抄』（一九六七年、岩波書店）。倉本修武氏「上皇女院の熊野詣（その二）白河上皇の院政と熊野御幸」『熊野誌』第30号 一九八五年一月

(28) 千鳥は平安後期以降になると、冬の景物として詠まれるようになる。片桐洋一氏編『歌枕歌ことば辞典増補版』（等間書院 一九九九年）参照。

(29) すでにいくつかの『新古今集』の注釈書で言及されている。

(30) 京極殿のこと。道長女彰子が長く住居した。女院名「上東門院」もこの邸第名による。師実に伝領された。（久保木哲夫 加藤静子 平安私家集研究会『範永集新注』（青簡舎 二〇一六年）参照。

(31) 白河院は愛娘の郁芳門院媍子が永長元年（一〇九六）八月七日に御歳二二歳で亡くなると、その二日後の八月九日に出家してしまう。